

本日の礼拝は、召天者記念礼拝と名付けて捧げる礼拝です。当教会で先に天国に召された方々のお名前を挙げ、在りし日を偲び、これらの方々が御国において神と共にある命に与かっていることを喜び、ご遺族の皆さまと共に、故人を思い起こしつつ礼拝をささげるのであります。お手元の週報に、召天者のお名前を記した一覧表が折り込まれていますが、ここに記されている大部分の方と、私は直接にお会いしていません。しかし、これらの方々が、当教会の一員として、あるいは教会員のご家族として長きにわたって教会を支えてくださったことを、機会あるごとに教会員の皆さまからお聞きしております。かつて、この教会で共に礼拝をささげ、また教会の活動を分かち合うことを通して、当教会の一つの時代を担ってくださったことに対して、牧師として心からの感謝とお礼を申し上げます。まことにありがとうございます。さらに、そのような方とともに、ここ数年の間にお亡くなりになり、私自身が葬儀の司式をつとめさせて頂いた方のお名前もここに記されています。そのすべての葬儀がかけがえのないものであり、今も鮮やかに心に残っています。共に教会生活を過ごした教会員、あるいはそのご家族の方を、感謝を込めて御国にお送りする葬儀のわざは、教会における最も大切な働きでの一つであります。

旧約聖書の創世記によりますと、「主なる神は土の塵で人を造り、その鼻に命を息を吹き込まれた。人は、こうして生きる者になった」と書かれています。人間は土から造られた。そして、やがていつかは土に帰ることになる。それは、すべての人に定められた厳粛な事実です。人間は有限なものであり、何百年も生きることは出来ません。しかし、誤解を恐れずに申し上げれば、人の命に限りがあることは、逆に神さまによって定められた摂理ではないかとも思うのです。命に限りがあることによって、人間はおのれの限界を知り、神の前に謙虚なものとなることを教えられます。さらに、神さまから与えられた限りある命を大切に、一所懸命生きようと努めることになります。人間が生きているということは、その人が自分の時間を持つということです。その時間をどのように使うか。すなわち、いかに生きるかという問いを、死は投げかけてくれます。本日の召天者記念礼拝において、先に召された方のこと思い起こすことは、あとに残る私たちがどう生きるかという問いと真剣に向き合うことでもあります。

新約聖書の手紙の一つであるコリントの信徒への手紙二、5章1節に、次のような使徒パウロの言葉があります。「わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています」幕屋とはテントを張って立てた一時的な住まいのことです。牧畜の民であったイスラエルの人々の寝泊まりの場所となりました。パウロは、人間にとって死とはその幕屋が壊れることだと言います。それは肉体の崩壊と言ってよいかもしれません。では、崩壊のあと何が残るのでしょうか。もし、聖書の信仰が無ければ、崩壊のあとにはただ虚無が残るのではないのでしょうか。死ねば、一切は無！、つゆのように消えてなくなり、ただ空虚な思い、虚しさが残るのみです。「死んで花実が咲くものか」などと言われるのは、死を虚無と見なしているのです。

しかし、新約聖書はそうではないと説くのです。それは、イエスご自身が、十字架上で死なれたあと3日目に墓を突き破って、弟子たちの前に姿を現わされた出来事に基づいています。主イエスは復活され、今も生きておられるのです。信仰に生きる者は、イエス・キリストの復活の命、永遠の命を頂き、新しく造り変えられた者です。罪人の死を死ぬ者ではなく、神との新たな関係に生きる者です。もっとも、この関係を手にしたからといって、地上の生の終わりが無くなるわけではありません。しかし、その終わりは神がなしたもう終わりです。終わりには神が続くのです。終わりのむこうは虚無ではない。初めにあったと同じ神がおられます。それは天地を創造された神の救いの歴史に、はじめと終わりがあるのと相似の関係です。神はアルファでありオメガである。それは創造で始まり、再臨で完成します。人間の死は、その神の救済史の一コマなのです。死が人生の完成であることを神は求めておられる。ですから、本来地上の生の終りは決して苦しみでも禍いでもありません。神が用意された終りです。死もまた神の支配のもとにある。ですから、死も生と同じように受動態で表現されるべきです。すなわち「死ぬ」のではなく「召される」のです。

そこで本日の聖書、ヘブライ人への手紙 11 章に移ります。すぐ前の段落には、信仰をもって死んでいったイスラエルの信仰の父祖、族長たちの名前が記されています。創世記に登場するこれらの人々（アブラハム、イサク、ヤコブ）は、みな牧羊者、つまり羊飼いでした。草を求めて土地から土地へと移り住み、天幕、つまりテントを張って仮住まいした人たちです。もともとはカルデアのウル、つまりメソポタミア地方の出身ですが、そこからアラム・ナハライム、すなわちシリア北部に移り住み、次いでパレスチナにやってきました。距離にして 1000 キロを優に超える長い旅になります。これらの地域は、年間を通して雨が少なく、草がそれほど生えません。従って、彼らは羊や山羊、牛を育てるために、草を求めて移動したのです。決まったところに定住するのではなく移動して暮らしました。彼らは寄留者として地上の生涯を歩みました。そんな彼らの人生を支えたものは、何だったのか。それは、信仰でした。信仰とは、神の言葉に従って生きること、未だ目に見えていないものを、神が見せてくださると信じて行動することです。アブラハムの人生は、この神の言葉に従うことによって切り開かれた人生でした。創世記 12 章で、神は彼に言われます。「あなたは生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい。」「父の家を離れる」とは、家族と別れて、全く知らない場所で暮らし始めるということです。それはアブラハムにとって、安全な場所、安心して暮らせる場所を捨てるということでした。行く先がどこかを知らないまま、アブラハムは神が示す地を目指して旅に出ました。当然、不安だったと思います。ですから、訪れた先が果たして神が示された土地であるかどうかを知るために、アブラハムはゆく先々で主のために祭壇を築きました。礼拝をささげて、都度、神のみ声を聞こうとしたわけです。旅の途中で飢饉に遭い、エジプトに避難したこともありました。アブラハムが選んだ場所を神さまが祝福すると言われたのは、それよりさらにあと、15 章になってからのことです。アブラハムは、行く先々で、神を礼拝する生活を重ねながら、神の言葉に聞き従ったのです。

信仰とは目に見えるものに依り頼むのではなく、目に見えない神の約束を信じてそこに賭けることです。神が語られる言葉を、その通りになると信じて行動することです。私たちは目に見えるものに心を奪われ、それに振り回されて、しばしば神が見えなくなります。そうならないように心がけたいのです。現実の世界に目に向けると、そこは心が暗くなることばかりです。今も世界各地で戦争が続いています。ウクライナで、ガザ地区で今なお攻撃が続いています。一方、わが国では初の女性首相が誕生しましたが、連立政権がいつまで続くのか、先は見えません。この国と世界の行く先はどうなるのか。先行きの見えない、不透明な時代が続くというべきではないでしょうか。しかし、地上の事柄を見て右往左往しても始まりません。アブラハムのように、先の見えない中で、しかし神の言葉にしがみついて生きるのです。彼は天国を仰ぎ見ることによって、たゆむことなく前進し、信仰者として人生を全うしました。彼にとって地上の生は仮住まいであり、本当の故郷は天にあると信じていた。天国こそ帰るところであったのです。

本日の午後には、教会の墓地で墓前礼拝がおこなわれます。人口減少にあるわが国では、親族がもはやその故郷に一人もいなくなり、無縁墓地が増えているという話を聞きます。墓じまいという言葉も耳にするようになりました。しかし、教会はそのようなことはありません。毎年、必ず墓所に出かけ、お花を捧げます。ただ、お墓は私どもの終着点ではありません。お墓が、私たちの魂の安らぐ場所ではない。私たちが帰る場所は天国です。天に故郷があるのです。地震や台風、大雨による土砂崩れや火山の噴火などの天変地異があろうとも、びくともしない天の故郷、それこそが私たちが帰るところです。墓所は、お骨を納める場所ではありますが、住む場所ではありません。私たちの住まいは天にあるのです。アブラハム、イサク、ヤコブはその天国をはるかに仰ぎ見ながら、喜びの声を上げ、地上では寄留者として過ごしました。天国に希望を置いていたのです。信仰に生きる者にとって死は恐ろしいものではありません。むしろ、神が備えられた住まいへの引越しです。本日の召天者記念礼拝を通して、「死は終りではない」ということを心に刻みたいと思うのであります。

お祈りいたします。